

R

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

Reed

No. 62

September, 2020

関西大学ニュースレター

発行日：2020年(令和2年)9月18日

発行：関西大学 総合企画室広報課

大阪府吹田市山手町3-3-35

〒564-8680 / TEL.06-6368-1121

www.kansai-u.ac.jp

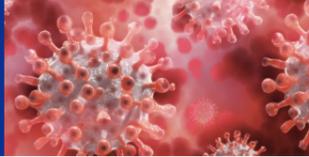


▶ 新型コロナウイルス感染症特集

学びを止めないために 関西大学が取り組んできたこと

2020年度春学期 関西大学 コロナ禍の記録

novel coronavirus



▶ 新型コロナウイルス感染症特集

学びを止めないために 関西大学が取り組んできたこと

2020年度春学期 関西大学 コロナ禍の記録 (2020年8月31日現在)

2020年の幕開けとともに新型コロナウイルス感染症に直面した日本。関西大学では、世界保健機関(WHO)の緊急事態宣言に先駆け、1月28日の「新型コロナウイルス感染症に関する対策本部」設置以降、政府や自治体の要請等に基づき、対応を進めている。

対策本部会議(以下、「対策会議」という)発足当初は、まだ中国・武漢での感染症と捉えられ、同地との往来予定者への注意喚起、マスクと消毒薬の確保と備蓄状況の共有、目前の入学試験実施上の対策を議論していた。それに基づき、受験生にも感染予防への協力を呼び掛け、2~3月の学部・大学院及び併設校の入学試験は予定どおり実施した。一方、春季休業中の学生や教員の海外派遣・受入等は、関係機関と協議した結果、ほぼすべてが中止・延期となった他、卒業式(第6回対策会議)・入学式(第7回対策会議)などの学内行事についても大幅な縮小や中止をせざるを得なかった。

さらに、本学では今後の感染拡大の波に備え、「新型コロナウイルス感染症に対する事業活動等の基準」を策定。この基準を指針として事業活動を継続している。



● 社会安全学部 高鳥毛 敏雄 教授

COMMENT 新型コロナをどう受け止め対応すべきか — 公衆衛生の立場から —

自然界には無数のウイルスが存在していますが、パンデミックを起こすものはごく一部です。パンデミックは、ウイルス側より、人間社会が流行する条件を揃えることで起こるものです。感染を媒介する人口は、過去100年で4倍以上(2019年約77億人)に増え、人口の都市集中が加速しています。このことが新型コロナウイルスの流行に関係しています。「三密を避ける」「人と人の距離を適切に保つ」などの新しい生活様式は、これまでの社

会が向かってきた様式とは異なるものです。そのため、私たち教育機関を含め、社会を大混乱させています。これまでワクチンで解決できた感染症は天然痘だけですが、ペスト、コレラ、インフルエンザ、結核などの歴史的な感染症の流行は社会が構造を変えることで乗り越えてきています。新型コロナについても流行する条件が分かっています。それを踏まえ、各自が対策の当事者と認識し、自らの行動と生活様式を変えることが大切です。

■ 「新型コロナウイルス感染症に関する対策本部会議」開催日一覧

回	開催日	回	開催日
第1回	1月28日	第12回	4月30日
第2回	2月3日	第13回	5月12日
第3回	2月6日	第14回	5月18日
第4回	2月19日	第15回	5月22日
第5回	2月26日	第16回	6月4日
第6回	3月6日	第17回	6月18日
第7回	3月12日	第18回	7月3日
第8回	3月23日	第19回	7月17日
第9回	4月2日	第20回	8月3日
第10回	4月9日	第21回	8月26日
第11回	4月17日		

● 状況を見据えた学びの環境を整備



▲ オンデマンド授業の収録を行う文学部・三村尚彦教授

春学期を迎えたころには国内でも感染が拡大し、第8回対策会議では、4月6~18日の休講を決定した。4月7日、政府により大阪府に緊急事態宣言(5月6日まで)が発出され、第10回対策会議では、4月20日以降もしくは対面授業を実施せず、他大学に先駆けてオンライン(関大LMS)を活用した遠隔授業を実施することとなった。春学期に開講される科目数は5,000科目以上。慣れない授業方法に戸惑いながら、教員同士が知を持ち寄り、自発的に授業展開のノウハウを共有し、3,000科目以上でオンライン化が達成された。

その後も感染収束の見通しが立たず、第12回対策会議では、春学期は原則遠隔授業とし、春学期試験を実施しない成績評価方法に変更すること、試験期間を補講期間にすることを決め、学生の学修機会の確保に努めた。並行して緊急事態宣言も5月31日まで延期さ

れた。教科書はオンラインで販売し、送料の一部を本学が負担した。

5月16日の大阪府の休業要請解除を受け、5月20~31日は学部・研究科が認めた実験・実習等および研究科が認めた少人数の科目に限り、十分な感染防止策を講じた上で対面授業を再開した。5月21日には大阪府への緊急事態宣言も解除されたが、6月1日以降も春学期は原則遠隔授業を継続しながら、政府・自治体の方針や感染の状況を踏まえ、一部の対面授業も並行して実施した。

外国人留学生の一時帰国者や新入生の中には日本に入国できず、休学する者もいたが、遠隔授業を受講する者もいた。そのような学生にもオンラインで教科書を販売し、送料の一部を本学が負担した。

■ 遠隔授業に関する学生へのアンケート

〈学部生版・回答数12,655件より〉

2020年度春学期の遠隔授業はWeb会議システムの活用やオンデマンドによる動画配信にとどまらず、なかにはグループワークや小テストも実施された。

アンケートによると、遠隔授業に「意欲的に参加している」と回答した割合は形態別に下のグラフのような結果になった。遠隔授業のメリットとして「自分のペースで学習できる」「何度も復習できる」を挙げる学生が多く、関大生が自身で効果的な学習目標の達成を実践し、自律的に学習する姿が見られた。



課外活動 : Extracurricular Activities

● 学生の活気が消えたキャンパス

課外活動は、新型コロナウイルス感染症の状況に鑑み、2月28日以降中止または延期とした。春学期授業の休講期間はすべての課外活動を禁止するとともに、学内の関係施設を閉鎖。その後、緊急事態宣言発出に伴い、キャンパスへの入構を禁止し、窓口業務を停止した。そのため、例年、新入生歓迎行事やクラブ・サークル活動の勧誘でにぎわう春のキャンパスは一変。5月16日の大阪府の休業要請解除後も、感染防止策の検討が終了するまでは課外活動を解禁

せず、6月8日から段階的に再開した。しかしながら、7月中旬から若年層の感染者が急激に増加したため、7月29日~8月31日は必要最小限の活動に留めた。



Message 体育会の学生らが感謝・応援メッセージを発信

コロナ禍で行動や活動が制限される中、関大生たちは、大学生として今できること、伝えられることは何かを考え、さまざまな取り組みを行っている。

そのような中、体育会本部は、日ごろからの活動支援者や、コロナ関連業務従事者の方々に対して、「感謝の言葉」や「応援メッセージ」をSNSで発信する企画を実施。各クラブから約2,000人の学生がメッセージを送った。また野球部では、全国の小中高生を対象に、「自宅でもできるオンライン野球教室」を開講。ワンポイントアドバイスやトレーニング方法などを動画で紹介した。



▲ 体育会本部長 山田洋丈さん(社4)の投稿

COMMENT

対策本部の活動を振り返って

● 社会安全学部 安部 誠治 教授 (シニアリスクマネージャー)

これまでの人間社会の歩みは、感染症との闘い、あるいは共存の歴史であったともいえます。今世紀に入ってから、私たちはSARSやMERS禍などにみまわっていますが、今回のコロナ禍は、世界的な大流行という点で、100年前の「スペインかぜ」以来のものなのです。

関西大学は、国内ではまだ数件の発症例しかなかった2020年1月28日に「新型コロナウイルス感染症に関する対策本部」を設置しました。大阪府の対策本部設置に遅れることわずか4日のことでした。2008年にすでに「感染症対応マニュアル」を策定していたこと、2009年の新型インフルエンザの流行時に対策本部を立ち上げた経験があったこと等が、こうした迅速な対応につながりました。

対策本部では、池内啓三理事長のリーダーシップの下、①諸業務のリスク評価、②キャンパス内の感染拡大の防止、③教育・研究の維持・継続、④学生への学修支援、⑤課外活動や大学の関係行事の見直しなどを柱に、併設校も含め対応策を打ち出してきました。社会が集団免疫を獲得するか、ワクチンや新薬が普及するまで、新型コロナとの格闘は続きます。引き続きコロナリスクの適切な管理を進めていきます。

新型コロナウイルス感染症特集

キャリア支援 : Career Support

一人一人の進路選択を支援する

キャリアセンターでは、本格的な就職活動期を迎える直前の10～2月にかけて学内で大規模な業界研究セミナーを開催。状況が緊迫する中、細心の注意と創意工夫により学生と企業の出会いの場を提供。4月以降、相談は対面型からオンラインに切り替え、模擬面接やエントリーシートへのアドバイスを継続して行った。加えて、緊急事態宣言下で著しく就職活動が制約されたことによる学生の不安感を少しでも解消するため、緊急アンケートを実施。回答者約1,200人へ個別に連絡を取り、各自の状況に応じた支援や助言を行った。

エクステンション・リードセンターでは、春学期開講講座の一部を募集中止したものの、開講日の延期やWEB講座への振替により、継続的に資格取得やキャリアアップを支援している。

入学試験 : Entrance Examination

関西大学で学びたい気持ちに寄り添う



高等学校の長期休校、模擬テストの中止など、新入試制度を開始する本学を志望しながらも、情報が得難い受験生を対象に、6月中旬～8月下旬にオンライン相談会やキャンパス見学会を開催した。



キャンパス見学会は事前予約制とするなど、徹底した感染防止対策のなか、受験生は熱心に情報を収集していた。キャンパス見学会開催後もオンラインの利点を生かし、個別相談や情報提供を継続した。

(写真上) オンラインによる個別相談
(写真下) キャンパス見学会に設けられた検温ブース

また、2021年度入学試験にかかる文部科学省からの通知を受け、大学入学共通テスト利用入学試験において、新型コロナウイルス感染症に罹患して受験できなかった受験生や特別追試験受験者に対する配慮のほか、年内に実施される各種入試の出願、選考、合格発表の日程を2週間繰り下げる措置を講じるなど、受験生の受験機会の確保を考慮した。

一方、大学院の入学試験は、出願に必要な資格試験の中止や延期、渡航や移動の制限がある中で、出願の書類や資格、入試の実施や選考方法の一部を変更することでおおむね予定どおり行った。



COMMENT

ポストコロナにおける主体的な学びとは

●学長補佐/人間健康学部
岡田 忠克 教授

新型コロナウイルス感染症拡大という未曾有の危機に直面し、多くの学生、教職員はこれまで経験したことがない教育の実践、学びのスタイルの変化に悩み、戸惑い続けてきました。状況が一進一退する中、授業の方針を検討するプロセスでは、学生や教職員の健康・安全と感染予防から、教育を受ける権利まで、慎重に議論を重ねました。相矛盾するそれらを両立させるという難しい局面に対しては、今後も継続した議論が必要だと認識しています。

遠隔授業の導入によって、新しい教育実践や学びの選択肢を手に入れた一方、双方向のやりとりが難しい中、学生のモチベーションや主体的な学修への意識をどのように醸成していくべきか。これは、どんな授業方法であっても、いつの時代でも変わりません。対面授業か遠隔授業かの議論で終始するほど、大学での学びは単純ではなく、両者が相互に補完していることは言うまでもありません。ポストコロナの大学教育の中で、遠隔授業をどのように位置づけていくかが問われていると感じています。

留学生別科 : Bekka

いち早くオンライン授業に対応

それぞれが目的をもって日本語や日本事情などを学ぶ留学生別科。一時帰国者や新生入生の中には日本に入学できず、休学せざるを得ない学生もいるが、限られた期間内で日本語の運用能力を高めるため、国内に滞在する学生に対しては、4月8日からオンライン授業を実施。7月からは一部対面授業を再開した。



併設校 : Annex School

オンラインも活用し、授業を継続

2月27日の政府による小中高校への休校要請以降、全併設校は休校・休園となった。

卒業(園)式は大幅に縮小し、入学(園)式などの学校行事は延期・中止としたが、各校ではオンラインなどを活用することで授業の継続を工夫してきた。緊急事態宣言解除以降は、各校・園で体制を整え、6月上旬からは分散登校(園)を開始。6月中～下旬からは段階的に通常授業・保育を再開した。

ウィズ・コロナの教育研究のかたち

—— コロナ禍の今、そしてその先を視野に ——

ウィズ・コロナに対応した教育や研究の在り方を模索・発信することも大学に期待される重要な役割。本学では各部門の特長を生かし、積極的に取り組んでいる。

質の高い遠隔授業をめざして
—— FDフォーラム・FDセミナー開催 ——



6月13日、教育開発支援センターは、第23回関西大学FDフォーラム「遠隔授業のデザインを考える —一人の縁を描く授業—」をオンラインで開催。学内外の大学関係者等を中心に339人が視聴した。前半は本学教育推進部の三浦真琴教授、山本敏幸教授、岩崎千晶准教授、多田泰紘特別任用助教から、後半は大阪大学をはじめ3つの大学から、各大学の遠隔授業に関する実践事例が報告された。

また、7月17日には、同センターがFDセミナー「コロナ禍の授業実践をふりかえり、遠隔授業の教育方法・評価方法を考える」をオンラインで開催。学内外の大学関係者等を中心に288人が視聴した。本学の安藤輝次文学部教授、山崎直樹外国語学部教授、池田勝彦化学生命工学部教授、関口理久子社会学部教授、岩崎千晶教育推進部准教授が、春学期の遠隔授業や評価方法について報告するとともに視聴者と意見交換をした。

社会安全学部が連続セミナーを開催

社会安全学部は産経新聞社と連携し、4回連続のオンラインセミナー「危機の時代 新型コロナが突き付けたクライシス」を開催した。講師は同学部の教員が交代で務め、ウェビナー形式で



視聴者の質問にも対応。ライブ配信の視聴者数は1,009人(4回合計)に上った。セミナーの内容は産経新聞に記事掲載されたほか、YouTubeでも配信している。

回	テーマ	講師
〈第1回〉 4月21日	「最悪シナリオ」はどこにある	高島毛 敏雄 教授 山崎 栄一 教授 永松 伸吾 教授
〈第2回〉 4月28日	緊急事態宣言 試される日本社会	元吉 忠寛 教授 近藤 誠司 准教授 永松 伸吾 教授
〈第3回〉 5月15日	「出口戦略」を考える 判断の根拠は何か	越山 健治 教授 菅原 慎悦 准教授 永松 伸吾 教授
〈第4回〉 5月22日	ポスト・パンデミックの世界を問う	高島毛 敏雄 教授 永松 伸吾 教授

新型コロナ対策研究プロジェクト7課題が採択

本学独自の緊急プロジェクト「新型コロナウイルス禍の克服に資する研究プロジェクト」が7月1日から本格始動した。感染症に起因する社会的課題や見過ごされがちな副次的被害などにも視野を広げた研究に取り組んでいく。学内公募で採択された7件(下表参照)に対し、総額1,000万円程度を助成し、研究期間は2021年3月末までを予定している。

研究課題	研究代表者 研究分担者
「コロナアーカイブ@関西大学」を核とした新型コロナウイルス感染症およびスペイン風邪の記録と記憶の収集発信プロジェクト	内田 慶市 外国語学部教授 藤田 高夫 文学部教授 岡田 忠克 人間健康学部教授 林 武文 総合情報学部教授
新型コロナウイルス感染症とその対策にかかる社会における情報流通の問題点と市民の行動：国際比較も視野に入れて	土田 昭司 社会安全学部教授 元吉 忠寛 社会安全学部教授 近藤 誠司 社会安全学部准教授
高分子ミセルを用いた対コロナウイルス経鼻型ワクチンの開発	大矢 裕一 化学生命工学部教授 葛谷 明紀 化学生命工学部教授
東南アジア諸国におけるコロナ対応と世界経済復興の役割に関する研究	小井川 広志 商学部教授
COVID-19における日本の対策本部活動状況の資料分析	越山 健治 社会安全学部教授
数理モデルによる新型コロナウイルスの感染性の探求	和田 隆宏 システム理工学部教授
銅含有樹脂を用いた3D造形による材料開発と抗菌性の検証	佐藤 知広 システム理工学部准教授

コロナアーカイブ@関西大学 コロナ禍を記録



関西大学アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)は、デジタル・アーカイブ「コロナアーカイブ@関西大学」を立ち上げ、本学関係者やその家族等からコロナ禍の日常を伝える写真、動画、文章、音声の提供を呼び掛けている。集まった資料はサイト(https://www.annex.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/covid19archive)で公開する他、今後の教育研究への活用も見込んでいる。

新入生の友だちづくりサイト「触れずにフレンズ」を開設

7月1日、学内で交流する機会に乏しい新入生のために、本学教育後援会が新入生友だちづくり支援サイト「触れずにフレンズ」を開設した。

このサイトは、本学インフォメーションシステムのID、パスワードを持つ新入生のみが参加可能。学部・学科、都道府県、趣味など、複数のカテゴリーに分かれた掲示板に書き込むことで自由に交流することができる。



新型コロナウイルス感染症特集

関西大学の修学支援 Study Support System 退学者を1人も出さないために

関西大学ではコロナ禍による経済的な理由から、学修の継続を断念する学生を1人も出さないため、公的な支援とは別に、本学独自の修学支援策を策定し実施している。第1弾支援では学修環境の整備や早急な経済的支援が必要な学生を中心に、第2弾支援ではコロナ禍でも目標に向かって努力する全学生を対象に、広く経済的支援を行う。

第1弾支援 関西大学の5つの修学支援策 (2020年4月発表)

SUPPORT 1	SUPPORT 2	SUPPORT 3	SUPPORT 4	SUPPORT 5
インターネット環境整備への支援	一人暮らしの学生への一律金の支給	「関西大学家計急変者給付奨学金」制度の拡充	「関西大学短期貸付金」の増額	学費の納入期日の延長
Wi-Fi ルーター ノートパソコンを 貸し出します。	一律 5万円 を 支給します。	既存の年額 24万円 に 加え、新たに 12万円 を 給付します。	貸付金上限額を 3万円 / 10万円 へ 増額します。	学費の延納・分納制度で 納入期日を 延長 します。
全学生	一人暮らしの学生	家計急変全学生	全学生	全学生
TARGET 〈対象者〉 遠隔授業の受講にあたって、各自で必要機器やインターネット環境が整わない学生	下宿生・寮生、外国人留学生・留学生別科生	家計が著しく急変したことにより学修が困難になった学生 ※外国人留学生・留学生別科生を除く	一時的又は緊急に生活資金を必要とする学生	

第2弾支援 関大生未来支援プロジェクト (2020年8月発表)

株式会社オービックの野田順弘会長(本学卒業生)からの寄付金2億円を基に、「ゆめサポー 夢実現支援金」等の支援金制度を開設。真摯に目標達成に取り組む学生を支援する。

SUPPORT 1	SUPPORT 2	SUPPORT 3
ゆめサポ ー夢実現支援金	新型コロナ急変奨学金 ー緊急奨学支援金	留学生の学びのための 野田奨励金
在学中に夢(目標)に向け活動する学生に 30万円 を支援します。	新型コロナウイルスの影響で、家計支持者の世帯収入が20%減少した場合、 12万円 を支給します。	2020年度秋学期の授業料30%を基準に奨励金を 支給 します。 (その他の奨学金等との調整あり)
全学生	家計急変学生	留学生
TARGET 〈対象者〉 夢や目標達成に向けて意欲をもって取り組む学生 ※単年度で終了せず、次年度以降も新規に募集する(予定)	新型コロナウイルスの影響による家計急変者で、学修困難になった学生 ※既存の家計急変者給付奨学金(死亡、失業、廃業等により家計支持者の世帯収入が著しく急変したことによる学修困難者への支援:24万円)は、別途継続 ※留学生別科生を除く	新型コロナウイルスの影響で学修が困難になった私費外国人留学生・留学生別科生

理事長からのメッセージ: Message from the Chairperson of the Board of Trustees



●学校法人関西大学 理事長 池内 啓三

学業継続を全力で支援します

本法人では、新型コロナウイルス感染症により影響を受けている学生を支援するため、さまざまな施策を実行しています。

まず第1弾として、経済上の理由から退学する学生を1人も出さないことを優先し、「家計急変者給付奨学金の拡充」や「短期貸付金の拡充」、またオンライン授業に対応するための「インターネット環境整備への支援」などを、4月から順次開始しました。

更に、現下の情勢を憂慮された本学校友で名誉博士でもある野田順弘氏(株式会社オービック代表取締役会長/CEO)から、母校の後輩を支援するためご寄付いただいた2億円を原資に、「関大生未来支援プロジェクト」を始動することができました。コロナ禍により、学生たちは経済的苦境を強いられるばかりでなく、留学やクラブ活動、インターンシップなどの多様な経験や機会まで奪われています。関大生にはそうした状況に負けず、夢をあきらめないでほしいとの願いを込め、本プロジェクトを発足させました。

多くの皆様のご助力をいただきながら、きめ細かな支援を実施しているつもりではありますが、学生の置かれている状況は一人ひとり異なっています。3万人の学生の履修状況や学費納入状況を1件1件手作業で確認しながら、支援からこぼれ落ちている学生がいないか、学業継続の意思がありながら退学する者がいないかを注意深く調査しています。

皆様には、本法人の取り組みについてご理解いただきますとともに、コロナ禍における教育・研究の充実に、一層のご支援をいただきますようお願い申し上げます。



対策本部会議の様子

学長からのメッセージ: Message from the President



●関西大学 学長 芝井 敬司

キャンパスでの学びに期待を寄せて

国内で新型コロナウイルス感染症がまだ「対岸の火事」であった1月28日、本学は同感染症に関する対策本部を設置しました。21回(2020年8月末現在)にも及ぶ会議では、安易な休講や行事中止の決定をせず、政府・自治体の方針や市中の感染状況を考慮し、正課授業、課外活動、各種行事、防疫体制にいたるまで審議・決定を重ねてきました。議論の過程でリスク回避のために行事や活動の全面中止を主張する声もありましたが、1か0かではなく何ができるのかを大切にに対応してきました。

今春以降、政府の緊急事態宣言と自治体の休業要請により、さまざまな場面でオンラインの活用が急速に進みました。本学も新学期早々オンラインを活用した運営に舵をきり、授業の配信のみならず、学外からの電子資料の閲覧や就職活動支援に至るまで、各部門で工夫し、対応してきました。同時に、通信機器の貸与はもとより、コンビニでの授業資料プリントサービスや制限を設けながらも図書館を活用できるサービスなど、可能な限り教育研究環境の維持に努めてきました。学生も教員も不便を感じながらもこの状況に順応し、それぞれが自発的にできること、すべきことに取り組んだ中で感じた意見や要望を寄せてきています。

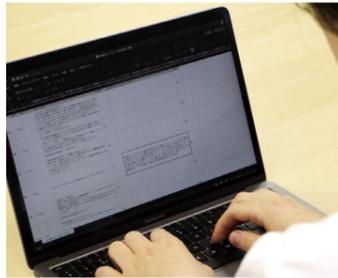
休業要請等の制限が解除されたものの、すぐに大教室で対面授業を開講することは困難です。しかし、秋学期には、適切な感染予防措置に留意しながら、学内施設の利用や対面授業の再開に踏み切る段階になったと判断しています。

大学のキャンパスは授業を通じて知識を学ぶ場であるとともに人との出会いの場でもあります。その教育的価値は計り知れません。本学は今後もそうした出会いが生まれる場であり続けたいと考えています。

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生インタビュー]

“なんでもオンライン相談”で 新入生の悩みを解決 先輩学生がオンラインで回答



6月8日、関西大学は学生による「なんでもオンライン相談」の取り組みを開始した。これは、新型コロナウイルス感染症の影響により、著しく学生生活が制限された状況下において、主に新入生を対象とし、学生生活全般に

関するさまざまな不安や悩みに、関大LMS(学習管理システム)を利用して事務職員やSA(スチューデント・アシスタント)が回答するというもの。SAは事務職員とZoomで連携し、平日の約2時間、5人体制で自宅などから質問に対応する。

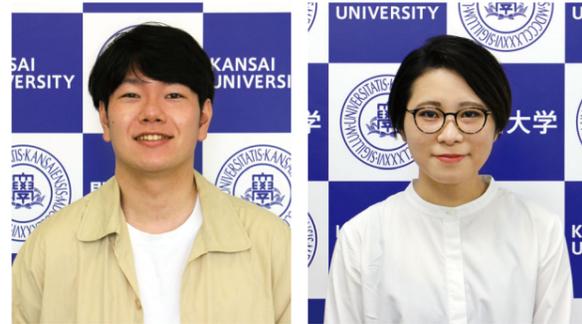
—「なんでもオンライン相談」には、どのような相談が多く寄せられますか?
清武 「夏休みはいつからなのか?」「先生への連絡方法が分からない」「欠席届の出し方は?」といった質問のほか、「課題が多く大変」といった内容もあります。



Online Consultations

▼新入生からのさまざまな相談に対して対応するSA、先輩学生として自身の経験も交えてアドバイスを送る

石川 和之—いしかわ かずゆき
■1997年、堺市生まれ。清風高等学校卒業。2年次の9月からSAとして業務に携わる。
清武 燈—きよたけ あかり
■1998年、岩手県生まれ。岩手県立盛岡第一高等学校卒業。SAの活動は今年で3年目を迎える。



●法学部 4年次生 石川 和之さん
●文学部 4年次生 清武 燈さん

石川 私も「勉強についていけず、不安」という相談を受けました。印象に残っているのは「1年次生のうちにやっておけば良かったことは何か?」という質問。SAのメンバーと、3年前を振り返りながら楽しく考えました。

—回答するのに難しかったことはありますか?
清武 「勉強が大変」「疲れる」など、SOSのような質問への回答は難しかったです。あと、自分とは違う学部で特化した質問が来ると、調べないといけないので大変でした。

石川 「どの授業がおすすめですか?」という質問は回答に迷いましたが、「自分が興味を持った方を選択してはどうですか?」とアドバイスしました。

—回答する時に心掛けていることは何ですか?
清武 自分たちには当たり前のことも、新入生にとっては当たり前ではない。新入生の立場に立ち、理解してもらえるような回答を心掛けています。

石川 できるだけ簡潔に、具体例を交えながら答えるよう気を付けています。

—オンライン相談を経験して学んだこと、得たことはありますか?
清武 最初はどのような質問が来るか予想が付きませんでした。皆さんさまざまな悩みを抱えていることが分かりました。そういう人たちの手助けができるのは嬉しいし、もっと頑張ろうという意欲がわきました。それから、普段使わない図書館のデータベースの使い方を調べることもあり、自身の学びにもつながりました。関大のことをより知ることができた気がします。

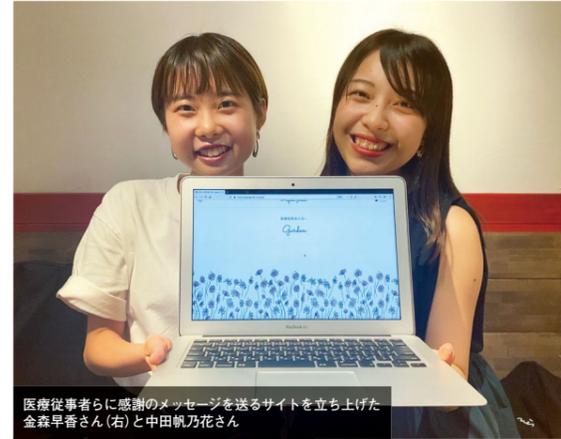
石川 通常のSAは、授業の準備や配布物を印刷する業務が主ですが、今回は相談役。新鮮だったし、困った人を助けるにはどうすれば良いのか勉強になりました。また、対面と違って文章はどうしても分量が多くなるため、分かりやすく伝えることの大切さや難しさも実感しました。人に伝える力が身に付いたと思います。

医療従事者らに 感謝の気持ちを伝えたい

ウェブサイト「Arigato Garden」を開設

●社会学部 3年次生 金森 早香さん

新型コロナウイルス感染症が拡大する中、私たちのために尽力されている医療、救急、福祉等の従事者に感謝のメッセージを送ろうと、金森早香さんと武庫川女子大学の中田帆乃花さんがウェブサイト「Arigato Garden(ありがとう ガーデン)」を開設した。寄せられたメッセージは、取材を行った時点で545件。閲覧した医師たちから、返礼のメールも届いている。



医療従事者らに感謝のメッセージを送るサイトを立ち上げた金森早香さん(右)と中田帆乃花さん



—なぜこのウェブサイトを開発しようと思ったのですか?

私は、新型コロナウイルスの影響で春からの留学予定が無くなり、自粛生活が始まりました。世の中が大変な状況なのにボランティアへ行くこともできない。この空いている時間を何かに役立てられないかと考えていたところ、ツイッターで医療従事者の方の「鳥の画像を送ってほしい」というツイートを目にしました。それに対して多くの方が画像を寄せていて「経済的な支援がすべてではないんだ!」と、ハッとしたんです。ありがとうを送る場所を作ることで、人の思いはつながり、誰かのためになるんじゃないか?—そう思って、このサイトを作りました。

—一緒に作った中田さんとはどういった関係ですか?

彼女は高校の同級生でした。高校時代、イベントでブースを出展する際に力を貸してくれたり、大学時代はクラウドファンディングのお手伝いをしてくれたりと、さまざまな場面で協力してくれていました。今回は「全力で手伝うから」と後押ししてくれました。

—ネーミングの意味を教えてください。

「ありがとう」は、たった5文字だけど心に残る言葉。花が好きなのでお花畑のデザインにしましたが、単にメッセージを送るのではなく、ありがとうの花がたくさん咲いていった方が、見た人に何かを感じてもらえるのではないかと思います。

—特に大変だったことは何ですか?

ウェブサイトの作り方とか全く知識がなかったですが、ウェブ制作会社の知人や作家の方など、周りの人たちに助けられました。苦労したのは広報。SNSでの拡散方法など、毎日考えていました。

—実際に開設して良かったことは何ですか?

ウェブサイトを作るまでは医療従事者の方々の本当の大変さを知りませんでした。また、保健所の職員や救急隊員の方、介護や教育関係の方たちと、私の知らないところで支えてくれている人がたくさんいることにも気付くことができました。

—反響はいかがでしたか?

一般の方からは「支えてくれてありがとう」「身を削って働いている姿に感謝の気持ちがあふれてきます」といったメッセージが次々に寄せられ、医師会などからは「心の安らぐ場所を提供した



▼▲ウェブサイト「Arigato Garden」と寄せられたメッセージ



できました」などの返信をいただきました。友達からの反響も大きく、バイト先や知り合いにも拡散してくれました。

—医療従事者をはじめ、コロナ禍で日々の暮らしを支えてくれている皆さんにメッセージをお願いします。

私たち学生は経済的な支援はできないので、これしかないと思って頑張りました。このウェブサイトを作り、改めて今の日本があるのは一生懸命に仕事を全うされている人たちのおかげだと実感しています。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

金森 早香—かなもり さやか
■1999年、福島県生まれ。兵庫県立伊丹北高等学校卒業。1・2年次には、社会学部祭実行委員会に所属し、企画したショーのMCを担当。2年次では副委員長としてチームをまとめ、学園祭の成功に尽力した。

LEADERS NOW!



誰もが自分のカラダを整えられる世の中を目指して

トレーニングで、けがの予防や痛みを伴う症状を改善する

●株式会社 R-body project コンディショニングコーチ
松野 慶之 さん —文学部2009年卒業—

健康であるためにはどんな運動が必要なのか?—けがによりスポーツ選手への道を断念した松野慶之さんは、正しいカラダの使い方を知る必要性を痛感。コンディショニングのスペシャリストとして、誰もがコンディショニングを学べる未来を目指す。

▼健康を支えるカラダのコンサルタント

「トレーニングもリハビリも、カラダの使い方を整えるという意味では同じ。それらを一貫して指導できる環境で働きたいと、ずっと思っていました。松野さんがコンディショニングコーチを務める「R-BODY CONDITIONING ACADEMY」は、トップアスリートがオーダーメイドで受ける多様なサービスを、一般の人にも届けるために設立されたコンディショニングセンター。会員の9割を一般会員が占めており、ゴルフやランニングのパフォーマンスを上げたい人もいれば、肩こりや腰痛、膝痛を和らげる目的で通う人もいます。コンセプトは「運動をする場所(ジム)ではなく、運動を学ぶ場所(学校)」。カラダを整えるための運動を学ぶことができるジムは国内ではまだ少なく、「R-BODY CONDITIONING ACADEMY」はカラダに関するコンサルタントの役目を担っている。「会員一人一人のカラダの現状を把握し、その人の目的や課題解決に向けたメニューを作成、提示します。例えば、膝に痛みがある場合、原因は股関節が動いていないからなど、他の部位にあることがほとんど。そこで、なぜ痛みが出ているのかをカラダの仕組みからしっかりと説明し、段階的な目標を決めて、機能を改善していきます」。必要であれば医師や治療家とも連携し、症状が改善して不安がなくなってから、よりフィジカルアップするコンディショニングに切り替える。理想は、トレーナーがいなくても自身でカラダを整えられるようになってもらうことだそう。「健康になるための方法はあまり学ぶ機会がなく、健康を損なわないとカラダの大切さには気が付きません。トレーニングを始めるのは結構勇気があることなので、私はそういう人たちを応援したい。一歩踏み出す挑戦を支えられる存在になれたらいいなと思っています」。

▼カラダの不調によって挑戦できない人を減らしたい

松野さんの転機は高校2年生の時。小学生から続けていたバスケットボールを、全治1年のけがにより引退を余儀なくされた。「くしゃみをしたり起き上がっただけでも股関節が痛かった……。整骨院などいろいろ行きましたが、カラダの使い方が良



松野 慶之—まつの よしゆき
■1986年、東京都生まれ。2009年関西大学文学部卒。同年株式会社 R-body projectに入社し、多くのクライアントのカラダ作りをサポート。17年より日本バスケットボール協会専任スポーツパフォーマンスコーチ、日本オリンピック委員会強化スタッフを兼任する。



Conditioning for Everyone

なのか? をコーチと話しながら、アプローチがぶれないよう常に意識してメニューを組み立てる。

東京オリンピックに向けての手応えを尋ねると、「順調に進んでいます」と返ってきた。昨年日本代表は世界ランク3位のオーストラリアに勝利し、メダル獲得を十分に期待できる位置にいると思われる。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で開催が1年延期になった今、数カ月にわたって通常通りの練習ができない環境の中で、それぞれの選手がどれだけフィジカル、またモチベーションを維持できているか心配は尽きない。

▼トレーナーの仕事がなくなるような健康大国へ

多忙な松野さんが、同業者に自社のコンディショニングメソッドをレクチャーしたり、企業に出向いて社員の健康作りをサポートしたり、一般向けの公開講座で健康について講義したりと、外部での活動も精力的に行っている。例えば企業の場合、健康上の問題で社員のパフォーマンスが低下したり、欠勤することになれば生産性が落ちてしまう。健康に対する意識の高い企業、また社員を大切に経営者ほど、健康経営の視点で依頼をしてくることが多い。サポート内容は肩こり、腰痛予防のためのコンディショニングや姿勢改善の指導から、健康に関する講座までさまざま。社員一人一人の健康管理を人事考課に組み込むことを考えている企業もあるという。「私は、多くの方が自分らしいカラダを手に入れて、人生を謳歌してほしいと願っています。そのためには健康がもっと重要視されなければいけません。健康は資産。企業だけでなく、社会的に健康へのリテラシーが上がってほしいですね」。

仕事のやりがいを尋ねると、「自分がサポートすることで、人のカラダが目に見えて変化していくのは当然やりがいを感じますが、それに伴いマインドも変わっていくのを目にすると、とてもうれしいです」という。痛い痛いと言っていた人がジョギングを始めたり、服装までアクティブになったり——。あるいは、トレーナーの仕事ってすごいね!と言われるのも、社会的価値の変化が実感できてうれしいのだから。「今でもトレーナー＝ジムに立っている爽やかお兄さんのイメージでしたから。日本のフィットネス人口は3~4%程度で、アメリカでも10%前後と言われます。私たちのいる業界はまだマイノリティですが、今後絶対に必要になってくる。トレーナーの価値はもっと上がっていくし、逆に言うと、肩こりや腰痛を和らげる方法が常識として浸透し、トレーナーの仕事がいらなくなるのが理想。そうなれば、医療費も下がるし、元気な高齢者も増える。そんな健康大国日本を目指し、これからも頑張ります」。

くないと言われるものの、痛みの原因や改善の方法は誰も教えてくれませんでした。バスケットボールをするために入学した高校。何かこれまでの経験を生かせる仕事をしないと——。将来の進路を考えた松野さんは、「自分のように、カラダの不調によって何かにチャレンジできない人を減らしたい」という思いにたどり着き、トレーニング指導のスペシャリストを目指すことに決めた。

トレーナー関連の専門学校に進学した松野さんは、実践的な知識と共にさまざまなライセンスを取得。更に学びを深めるために、全国各地の大学に直接アポイントを取り、足を運んで編入学先を模索した。そんな時に、関西大学で体育会バスケットボール部の監督と出会い、監督がバスケットボールに関する研究をしていることを知った。「バスケット部に携わりながら自分の知識も深められる。最も充実した環境だと思いました」。それが決め手となって、関西大学へ進学。バスケットボール部のトレーナーとしてメンバーのコンディショニングをサポートし、チーム作りに貢献した。「マネージャーやアシスタントと連携をとり、スタッフチームのような形で活動してきました。3年次生から急に入ったのに快く受入れてくれた仲間には、本当に感謝しています」。

また、大学生活では時間管理も身に付けた。編入学生はただでさえ授業数が多い。松野さんは卒業後に海外の大学院へ行くことも視野に入れ、ネイティブの教員に頼んで卒業に必要な英語の授業にも積極的に参加した。キャンパス内の掲示板等もこまめにチェックし、将来に結びつく講座やイベントを受講。昼休みには留学生とのランチ交流会にも参加した。さらに、フィットネスクラブでもパーソナルトレーナーとして活動していたというから、そのバイタリティには舌を巻く。「振り返ってみると、結構頑張っていましたね。大学は“やりたいことを見つける種”がたくさんある場所。あのころのすべての経験が、今の仕事に生きています」。

▼日本代表チームのパフォーマンスコーチとして

松野さんは、2017年から女子バスケットボール日本代表チームのパフォーマンスコーチを務めている。元々、女子バスケットボールの実業団チームのフィジカルコーチをしていた経歴もあり、白羽の矢が立った。

代表チームでの役割は、合宿等に帯同して選手のフィジカルを向上させること。体格で劣る日本人が、海外の選手相手に対等に戦うためには、フィジカルの上昇が不可欠な要素となる。「合宿に招集された時よりも良い状態で帰ってもらえることが重要。特に代表チームでは、痛みを押しつけてプレーを続ける選手も少なくありません。負荷を掛け過ぎず、それでも徐々にフィジカルを上げていくために、チーム間でのコミュニケーションを更に綿密にしていく必要があります」。

また、どれだけフィジカルを上げてもチームの戦術に生きるものでなければ意味がないため、どんなバスケをして勝ちたいのか? そのために各選手がどのようなフィジカルを身に付けるべき



■研究最前線

ICT を活用した学習環境デザインを研究 ・ Learning Environment Design Utilizing ICT



コロナ禍における
オンライン授業の実践と支援

ハイブリッド型教育を見据えて

Implementation and Support for
Online Classes During
the Coronavirus Pandemic

Looking Forward to Hybrid Education

●教育推進部 岩崎 千晶 准教授

• Division of Promotion for Educational Development
— Associate Professor *Chiaki Iwasaki*

2020年度春学期、新型コロナウイルス感染症拡大の対策として、急遽各大学はオンライン授業への対応を迫られた。関西大学も4月20日から全学オンライン授業に移行。高等教育を中心に、学習環境のデザインについて研究する岩崎千晶准教授は、関大LMS (Learning Management System) やウェブ会議システムのZoomなどを使い、より良い授業を行う環境作りを奔走している。

The spring semester of 2020 saw many universities having to arrange swiftly for classes to be conducted online as an emergency response to the spread of the novel coronavirus. Here at Kansai University, we transitioned to delivering all classes online starting on April 20. Chiaki Iwasaki, an Associate Professor researching the design of learning environments with a focus on higher education, is striving to create an environment that provides optimal support to classes, using tools like the videoconferencing system “Zoom” and the Kandai LMS (Learning Management System).

■ ICTを活用し、より良い学習環境をデザインする

— ご専門の教育工学について教えてください。

学習のプロセスや教材等の設計、開発、運用に関する理論と実践を扱う学問です。簡単な例を挙げると、教室内にパソコン等のメディアが導入された際、より良い学習環境を作るにはどうしたらよいかを研究します。システムを構築する開発寄りの研究や、構築されたシステムを活用して学習の質を上げるための活用に関する研究がありますが、私はどちらかといえば後者ですね。

— 先生は関西大学総合情報学部の1期生と伺いました。当時の学びは、現在の研究に役立っていますか？

総合情報学部を選んだのは、英語教育とコンピューターの活用の両方に注力されていて、面白そうだし今後役に立つだろうと思ったから。学部ではメディア教育を中心に学び、日々、映像・マルチメディア・広告ポスター・冊子等の制作実習に取り組みました。今、eラーニング教材の制作に苦慮していないのは、確実に総合情報学部での学びのおかげだと感謝しています。

■ 教員の不安や疑問に丁寧に向き合う支援

— 4月7日の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言発出を受け、関西大学は同月20日から原則として全学オンライン授業に切り替わりました。準備はどのように進めたのでしょうか？

4月20日からのオンライン授業実施は他大学と比べても早い方で、この4月は先生方の支援に全力を注いでいました。関大にはもともと課題レポート、各種テスト、授業に関する質問受付等に使える関大LMSというシステムがあり、まずはそれを活用するための準備にかかりました。本来、関大LMSは授業の補完ツールであり、これをベースに授業するのは誰もが初めての試みです。操作方法に精通していない先生もおられる状況からのスタート。教育開発支援センターの教員を中心に、FD(ファカルティ・ディベロップメント)セミナーの内容を決定し、各種マニュアルや資料を作成しました。

個人的には2月に韓国の大学の様子を調査し、いずれ日本もZoomを活用して授業をすることになると感じて、3月からZoomの個人契約をして準備を進めていました。

— 教員への支援内容を教えてください。

4月1日から週3~4回のペースで、相談会やセミナーを開始しました。先生方の不安を取り除くことから始め、教育方法に関することを主に、オンラインを活用した授業設計やICTシステムの操作について等、段階を経ながら進めていきました。先生方は苦勞されたと思いますが、とても熱心で、自身がやりたいことを実現するためにはどうすれば良いのかと、多くの相談が寄せられました。

FDやセミナーは現在も続けています。最近(7月)の参加者数は学内の教職員で約50人、学外者は約450人と、以前の3倍以上。当初は対面でしたが、感染拡大に伴いオンラインに切り替えたところ、その方が参加しやすかったようです。今は、授業の評価方法に関することに焦点を当てています。講義や演習、理工系の実験、心理学の実習等の評価をオンラインでどのように行っているのかなど、先生方の疑問を少しでも解消できればと思います。

■ Using ICT to Design a Better Learning Environment

— Please tell us about your special research area “educational technology.”

This academic field deals with both theory and practice relating to the planning, development, and implementation of study processes, learning materials, etc. Put simply, this field investigates ways to create better learning environments, taking advantage of the ubiquity of computers and other such media devices on the classroom. Some educational engineering researchers focus on the development of novel systems, while others concentrate on identifying methods to improve the quality of study using existing systems. My work probably belongs more to the latter category.

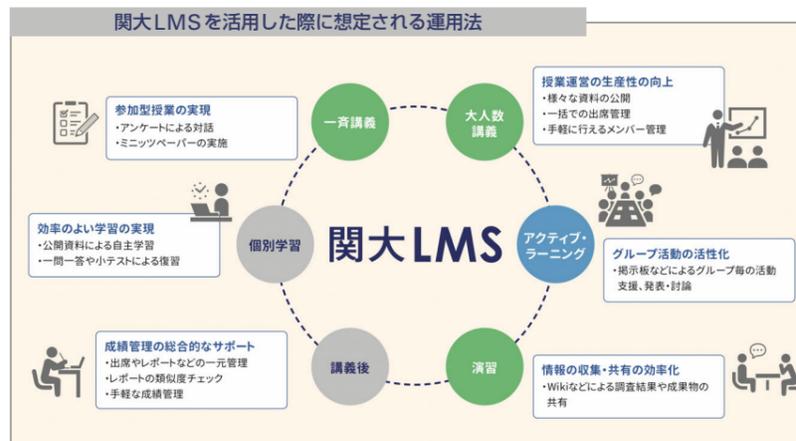
— I heard that you were one of the first generation of students of the Kansai University Faculty of Informatics. Did your studies back then help you with your current research?

I chose the Faculty of Informatics because its focus on both English education and computer utilization was really fascinating to me, and I thought it would be useful in the future. As an undergraduate, I focused on media education, training every day in producing advertising posters and videos, editing booklets, and preparing multimedia study materials. I really feel that the reason I can confidently produce e-learning materials now is a result of my experiences in the Faculty of Informatics back then.

■ Providing Support to Compassionately Address Faculty Members' Worries and Concerns

— Following the April 7 announcement of a state of emergency to deal with the novel coronavirus outbreak, on April 20 Kansai University switched over to running all classes, in principle, over the Internet. How did you prepare for this?

We shifted relatively quickly to running classes online when compared with other universities. I devoted all my efforts to supporting teachers this April. Kansai University already had a system in place called Kandai LMS, which could be used to report assignments, to administer various types of tests, to support class-related Q&A sessions, etc. To utilize this system during the state of emergency, a range of preparations was required. Kandai LMS was originally intended as a support tool for classes, so repurposing it as a basis for running classes was a first for us all. Initially, we found that some teachers were unfamiliar with how the system operated. Working principally with staff at the Center for Teaching and Learning, we agreed on the contents of a training program and produced a corresponding series of manuals.



▲FDオンライン相談会の様子
FD consultation meeting on classes using online

教員用に制作された
関大LMS操作マニュアル
KANSAI University Information System & KU-LMS Manual [For Instructors]





■研究最前線

オンライン授業開始前のワンポイント講座で学生をサポート

— 並行して学生への学習支援も行われていたのでしょうか？
 そうですね。関大は3スタイルのオンライン授業——①Zoom等を活用するリアルタイムの遠隔授業、②講義動画等を視聴するオンデマンド配信の授業、③スライド資料等から学ぶ教材提示による授業を開始しました。これに先立ち、4月6日から毎日30分、全23回のライティングラボによる「Zoomで学ぶワンポイント講座」を開講しました。元々、ライティングラボは、レポートの書き方やプレゼンテーションの仕方等、アカデミックスキルに関するワンポイント講座を実施したり、学生のライティング相談に大学院生のチューターが応じたりする本学独自の学習支援組織。その従来の講座内容に「Zoom・関大LMSを学ぶセミナー」を加え、オンラインで配信しました。また、同時に、私の研究の一環であるeラーニング教材や「レポートの書き方ガイド」等も提供。ワンポイント講座は自由参加でしたが、いずれも100人以上の学生が参加し、eラーニングの登録者数も3,000人以上となりました。

オンライン授業の開始前に講座を開講したことで、学生にはZoomによる授業を体験してもらうことができ、比較的スムーズに授業へ臨んでいたのであればうれしいです。

オンライン授業の成果を可視化する

— アフターコロナにおけるオンライン授業の可能性については、どのようにお考えですか？

まだ大変な状況ではありますが、オンラインのメリットも見えてきました。例えば、教員はアクセスしてこない学生をオフライン時よりも早い段階で気付けるようになりました。また、難解な講義内容をオンデマンドで何度も復習し理解を深められるようになったという声もあります。教員への質問も従来よりしやすいようです。このように効果が目に見えるものに関しては、今後は対面型とオンデマンド型を併用するなど、ハイブリッド型の教育が進んでいくべきではないかと考えています。

— 他に、オンライン化に起因する発見等ありましたか？

今の学生が、こんなにも力を発揮するのだと驚いた出来事があります。自粛期間中、学生はクラブ活動もアルバイトもできず家にいて、予習・復習にかかる時間がたくさんありました。1年次生向けの「スタディスキルゼミ」のグループワークで、「〇〇をよくする」をテーマにプレゼンテーションをしたのですが、あるグループは、オープンキャンパスが開催できないことに着目し、オンラインオープンキャンパスの広告について全国100大学分を調査して発表しました。また、別のグループは、Zoomでの授業や面接における初対面時の第一印象をより良くするにはどうしたらよいかを、部屋の明るさや洋服の色等の写真撮影をして調査・分析しました。私はこの授業を10年ほど担当していますが、素晴らしい内容であり、今の状況ならではの発想でした。

— 今後、関西大学が取り組むべきこととは何ですか？

3つのスタイルのオンライン授業を展開している大学は、そう

3スタイルのオンライン授業	
Synchronous 同期型	Web会議システム(Zoom等)を活用し、学生はリアルタイムで配信される講義や双方向の議論をとおして学び、小テストや課題提出による理解度確認や質疑応答、学生同士の意見交換等を行う授業
Asynchronous 非同期型	関大LMSを活用し、学生は各回の講義動画やナレーション付き講義資料を視聴することで学び、小テストや課題提出による理解度確認や質疑応答、学生同士の意見交換等を行う授業
③教材提示による授業	関大LMSを活用し、学生は提示された各回のスライド資料など教材として学び、小テストや課題提出による理解度確認や質疑応答、学生同士の意見交換等を行う授業(インフォメーションシステムの「講義連絡」で自習や演習を指示し、メールや掲示板などで質疑応答を行う授業もこれに含む)

Zoomで学ぶワンポイント講座	
▼1・2年次生向けワンポイント講座	
回	講座内容
〈第1回〉	初年次教育の心構え
〈第2回〉	ノートテイキング
〈第3回〉	レポートを書き始める前に
〈第4回〉	テーマを決めよう
〈第5回〉	レポートの構成
〈第6回〉	口頭発表の方法
〈第7回〉	スライド資料の作り方
〈第8回〉	レポートにふさわしい表現
〈第9回〉	引用と参考文献
〈第10回〉	ライティングラボの活用 —文章をよりよくするために—

多くはありません。ネットワークへの負荷を考え、音声と資料や、資料だけで講義をする大学も多い中、関大は早い段階でZoomの包括契約を結んで良かったと思います。オンライン化の結果としてどんな授業が実践できたのか？それを発信していけば、今後新しい学びのスタイルが見えてくるのではないかと思います。また春学期末に、学生に対してアンケート調査を実施しており、約1万人から回答が来ています。こんなに多くの回答が集まったのはこれまでになかったこと。学生たちの意見は、教学IRプロジェクトとして、きちんと分析し報告していく予定です。

また、それに先駆けて先日、論文『関西大学のオンラインを活用した授業の取組みと課題(『大学教育と情報』2020年度No.1)』を同僚の先生方と発表しました。今回の状況や取り組みを忘れないように。そして、こういう時期だからこそ、教育工学者として前に進んでいく姿勢をなくしてはいけなと思っています。

— 今後の展望をお聞かせください。

今後はこれまで以上に学部と連携したFD支援ができればと思っています。また、2014年に出版した拙著『大学生の学びを育む学習環境のデザイン—新しいパラダイムが拓くアクティブ・ラーニングへの挑戦—(関西大学出版部)』の第2弾として、現在、『リスク社会を乗り越えるこれからの大学教育』の出版準備を進めています。各学部の先生方と協力し、講義、演習、外国語教育、実験、実習、大学院の授業実践を紹介し、分析してこれからの大学教育について知見を提供できればと考えています。学内はもちろん、他大学の先生にも役立てていただける内容にしたいと思います。

I examined from Korean researchers in this February how universities there are doing. I realized that Japan too would eventually have to utilize Zoom for its classes, so in March I made personal contact with Zoom and started moving ahead with preparations.

— Please tell us about the kind of support you provide to teachers.

On April 1, we started holding faculty development (FD) consultations and seminars three to four times per week. We first worked to relieve any kind of unease teachers might have, before progressing to training in online-based class design, operating the ICT system, etc., with a focus on educational methods. I think it was a real strain on the teachers, but they were very enthusiastic, and came to us with a lot of questions on how best to achieve their goals for their classes.

We are continuing to run FD consultations and seminars, though less frequently as the need decreases. The number of participated teachers now includes around 50 of our university's faculty members and around 450 non-members – triple the number we had previously. Initially we conducted these sessions in person, but when classes went online as the infection rate increased, it became easy for the participants themselves to take online sessions. Right now, we are emphasizing class evaluation methods. I want to contribute, even just a little, to solving teachers' problems, such as how to perform online evaluations of lectures, seminars, science and engineering experiments, and psychology training.

Supporting Students through Seminars before Online Classes Commence

— Did you run learning support for students at the same time?

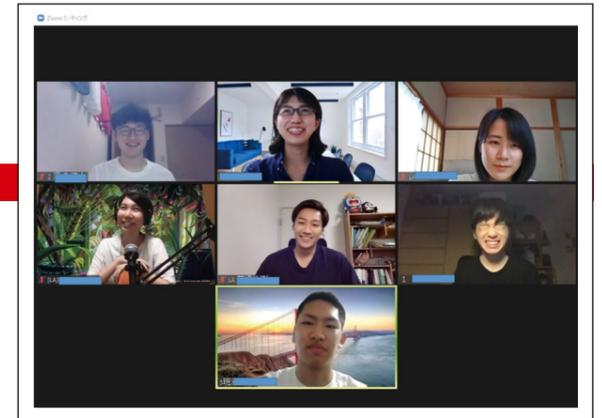
Yes, we did. Kansai University has implemented three types of online classes: (1) real-time remote classes using Zoom or similar tools; (2) on-demand broadcast classes in which students watch lecture videos, etc.; and (3) classes where teaching materials such as slides are presented to students. Prior to this, Writing Labo introduced an introductory course on how to make efficient use of Zoom-based classes. Half-hour sessions were held every day for twenty-three days, starting on April 6. Writing Labo started out as Kansai University's original learning support organization. It arranges seminars for students, teaching academic skills such as how to write reports and how to make presentations, and links graduate students with undergraduates to serve as tutors for academic writing consultation, etc. An online streaming "Seminar to Learn Zoom and Kandai LMS" was added to these original resources. Simultaneously, we have provided e-learning materials (one of my research topics), a report-writing guide, and other such materials. The seminars are open to all our students and each one has achieved triple digit attendance figures. The number of people registered for e-learning has jumped to more than 3,000.

By offering these seminars before online classes began in earnest, students were allowed to experience Zoom-based classes in advance. It gives me great pleasure to think that this allowed online classes to be introduced relatively smoothly.

Visualizing the Results of Online Classes

— How do you feel about the possibility of online classes in the post-coronavirus world?

The situation remains pretty severe, but the advantages of online education have become increasingly clear. For example, the lecturer can now see at an earlier stage when a student has not checked in. Additionally, we have heard from students that if class content was difficult to follow, they can use the on-demand service to review it as many times as necessary to gain a deeper understanding. It has also become easier than ever before for students to ask their instructors questions. Given these kinds of results, I really feel that there will be a need to promote a "hybrid-type" education in future, combining in-person and on-demand classes.



▲オンライン授業のグループワーク
Group work in online class

— Are there any other discoveries or observations that you have made as a result of the move online?

Some things really surprised me, such as the strength shown by current students. During the voluntary quarantine period, they couldn't engage in club activities or do part-time jobs, but had to stay at home where they had a lot of time to devote to preparatory study and revision. The freshmen, in their group work for my "Study Skills" seminar, made presentations on the theme "Making ○○ Better." One group turned their attention to the inability to have open campus days. They performed a study on the online open campus of 100 universities around Japan and presented their results. Another group undertook a survey and analysis of things like room brightness, clothing color, etc., taking photos of different combinations with the goal of improving first impressions on Zoom. I have taught this class for ten years, and these were truly brilliant presentations, both of which reflect ideas born out of the present situation.

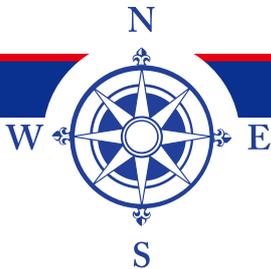
— What initiatives should Kansai University pursue going forward?

Few universities have developed three varieties of online class like we have. Most other universities are worried about putting pressure on their networks, and so are running classes relying only on audio and documents, or even just documents. I think it is a real achievement that, by contrast, Kansai University was able to enter into a comprehensive contract with Zoom at an early stage. If we tell the world about the kinds of classes we were able to put into practice as a result of this move online, just imagine what other new forms of learning could emerge. We distributed a questionnaire to students at the end of the spring semester, and we have received around 10,000 replies. This is the first time we have ever received so many responses to a survey. We plan to analyze students' opinions thoroughly and present them visually as a pedagogical institutional research project.

Ahead of that, some colleagues and I recently published the paper "Initiatives and Challenges in Classes at Kansai University Utilizing Online Tools" (JUICE Journal, 2020 No. 1). We mustn't forget about the current situation and initiatives. Precisely because of the challenging times in which we live, educational technology researchers like myself must not lose our commitment to pushing forward.

— Please share with us your plans for the future.

I'm hoping to be able to coordinate with the various faculties to provide continued FD support. I'm also preparing for the publication of Future University Education to Overcome the Risk Society, a sequel to my 2014 book The Design of Learning Environment for Active Learning: The Challenge of Kansai University (Kansai University Press). I also hope to collaborate with teachers in various faculties to assess classroom practice in lectures, seminars, foreign-language classes, experiments, training, and graduate school scenarios, which I can then analyze to provide information to contribute to the university education of the future. I intend the results to be useful not only to Kansai University faculty members but to teachers at other universities as well.



総合図書館春学期企画展を開催 「知りたい!」が未来をつくる「知りたい!」で世界をひろげる」

3月25日～7月22日、千里山キャンパスの総合図書館では、理化学研究所と編集工学研究所の共同事業「科学道100冊」に賛同し、企画展「「知りたい!」が未来をつくる「知りたい!」で世界をひろげる」を開催した。



「科学道100冊」プロジェクトは、書籍を通じて科学者の生き方や考え方、科学の面白さ、素晴らしさを届ける活動。本企画展は、変化の激しい時代を生き抜く知恵として、理系だけでなく文系の学生にも読んでもらいたい本の数々を紹介したほか、知らないことや、分からないこと、難しいことを「知りたい!」へつなげていくための図書館活用術も分かりやすく説明している。

関西大学博物館企画展を開催 「受贈記念 横山滋ガラスコレクション びいどろ・ギヤマン・ガラス展」

6月1日～7月31日、千里山キャンパスの関西大学博物館にて「受贈記念 横山滋ガラスコレクション びいどろ・ギヤマン・ガラス展—ガラス器を愛で愉しむ—」を開催した。

2018年度、博物館は広島在住の医師・故横山滋氏が収集したガラスコレクションを一括して受贈。それを記念した本企画展では、近世の和ガラス—びいどろ、和製ギヤマンをはじめ、江戸期の輸入ガラス、近代ガラスの名品など、約200点を厳選して展示した。また、近代の大阪で制作されたガラス器や、広島原爆で被災したガラス器も紹介した。



関西大学年史資料展示室企画展を開催 「関西大学 学生スポーツの歴史」

6月1日～2021年3月19日、千里山キャンパスの年史資料展示室では、2020年度企画展「関西大学 学生スポーツの歴史」を開催している。

本企画展は、本学が大学に昇格した1922年前後から1930年代までを中心に、前身の関西法律学校時代も含め、学生スポーツの発展と選手たちが活躍した歴史を振り返るもの。1926年に水泳部員が鳴門海峡を遠泳した際に贈られたたばこケースや、1939年にモナコ公国で開かれた国際大学スポーツ週間に参加した大島謙吉氏と谷口睦生氏に贈られた日章旗の寄せ書きなどが展示されたほか、本学にゆかりのあるオリンピック・パラリンピック選手も紹介されている。



体育会サッカー部の長井一真さんが京都サンガに入団



©KYOTO.PS

体育会サッカー部の長井一真さん(社4)が2021年シーズンからJリーグ・京都サンガF.C.に加入することが決定した。

長井さんは、高い身体能力と危機察知能力に優れたディフェンダー。足元の技術が高く、正確なキックで攻撃の起点にもなれる選手。「感謝の気持ちを忘れず、その思いをプレーで表現し、夢や希望を与えることのできる選手になるために日々精進していきます」と抱負を語る長井さんから目が離せない。

なお、現在Jリーグでは、本学卒業生24人が活躍している。

「新型コロナウイルスに係る緊急奨学支援金」を募集

関西大学では、コロナ禍による経済的理由で修学が困難となった本学学生を支援するため、皆さまにご寄付のご支援をお願いしております。本支援金の趣旨にご賛同いただき、ご支援・ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

募集期日 2021年3月31日まで(銀行振込のみ)
※インターネット募金は1月15日まで

問い合わせ先 学校法人関西大学財務局募金室 TEL 06-6368-1137

申込方法
インターネットまたは金融機関窓口から申込みが可能です。下記ウェブサイトからご確認ください。



◀「関西大学 新型コロナウイルスに係る緊急奨学支援金の募集について」(お願い)

Website Renewal!

関西大学ウェブサイト
をリニューアル!



関西大学ウェブサイト(www.kansai-u.ac.jp)を全面リニューアルし、9月15日にオープンした。ユーザビリティを考慮したサイト構造、デザインに一新。「HEAD LINES」等コンテンツも充実させ、関西大学の「いま」を発信するブランドサイトとして生まれ変わった。

関西大学ウェブサイト▶

